

Colonel Sellers と「金（カネ）」

—— *The Gilded Age* に学ぶ Mark Twain の経済観と作品の関係 ——

山 本 祐 子

序

The Gilded Age (1873) は、Charles Dudley Warner との共作という形で Mark Twain が手がけた初めての小説である。*The Gilded Age* には19世紀後半に巻き起こった未曾有の投機ブームや政治腐敗が描かれていて、この作品名が同時代を総称する名前にまでなった。このことからしても察せられるように、*The Gilded Age* はアメリカ史上最も傑出した経済発展の時代を扱い、この時代の特徴とも言える「金（カネ）」の問題を克明に映し出した注目すべき作品である。

にも関わらず *The Gilded Age* は、Twain 研究家の間ではないがしろにされてきた。Warner との共作であったことから、作品としても、Twain 批評としても一貫性に欠けると倦厭されたからである。また時事問題を扱い、風刺文学の体裁をとりながらも、その風刺の対象や意図が明確に示されていないことも問題視された。何よりも文学批評の領域では、経済問題、とりわけ「金」の問題を軽んじる傾向があって、なおさら *The Gilded Age* は敬遠されがちとなったのである。文学と「金」は相容れないという気風にあって、*The Gilded Age* における主要テーマである「金」を具体的に追及し、作品の文学的理解にまで結び付けられることはこれまで一度としてなかった。唯一 Bryant Morey French は *Mark Twain and the Gilded Age* において作品の背景となった政局や歴史的事実を詳細にまとめてくれているが、それらの研究が文学的批評にまで反映されるに至って

いない。

しかし「金」が Twain の小説家としての想像力を刺激し、Colonel Sellers という前代未聞の登場人物を生み出したことは確かである。Colonel Sellers は “the Gilded Age” の申し子とでも言うべき人物で、一攫千金を成し遂げようと幾多もの “speculation” (投機) を考え出しては友人・家族を巻き込んで邁進していく。彼はどれほど手痛く失敗しても飄々として息を吹き返し、新たな投機話に熱中するのだ。彼がひとたび投機話に花を咲かせると、際限なく膨れ上がり、次第に巨万の富が目の前に広がっているかのような錯覚を聞き手に与え、虜にになってしまう。Sellers の誇大妄想とも思える語りには、Charles Neider や永原誠も認めるように、Twain の真骨頂を感じさせ、tall tale や yarn に匹敵する魅力があった。そのため1874年には喜劇役者 John T. Raymond が Colonel Sellers を主人公とした喜劇を上演して、大人気を博すまでにいった。とはいえ Sellers の真価が「金」をとおして理解されてきたとは言いがたい。本稿では、これまで見過ごされてきた「金」の問題に焦点をあてて Sellers の語りを読み解き、新たな Sellers 像を探ることで、*The Gilded Age* の再評価を試みるものである。

I

Washington Hawkins が働き口を求めて Hawkeye に来ると、Colonel Sellers は幾つもの投機話を吹き込んで、Washington を一攫千金の夢へと誘っていく。そのなかで話はいつものごとく膨らみ続け、ついに Sellers は国際的な銀行一族 Rothschild から巨万の投機話を持ちかけられているとまで言い出す。¹

“——for I wouldn't have it get out for a fortune. They want me to go in with them on the sly—agent was here two weeks ago about it—go in on the sly” [voice down to an impressive whisper, now,]

“and buy up a hundred and thirteen wildcat banks in Ohio, Indiana Kentucky, Illinois and Missouri—notes of these banks are at all sorts of discount now—average discount of the hundred and thirteen is forty-four per cent—buy them all up, you see, and then all of a sudden let the cat out of the bag! Whiz! The stock of every one of those wildcats would spin up a tremendous premium before you could turn a handspring—profit on the speculation not a dollar less than forty millions!” (86)

Barton Hepburn の *History of Currency in the United States* によると、Sellers が挙げている Illinois や Indiana を含め多くの州では1840年頃から1860年代にかけて“free banking system”を採用していた。このシステムの下では、一人でも銀行を設立して、銀行券いわゆる紙幣を発行することが可能となった。規制がゆるくなったことで、雨後の竹の子のごとく銀行は乱立し、無秩序に紙幣を発行していったのである。Indiana ではわずかな資本と印刷機だけを携えて、事務所も開かず、紙幣だけを発行する怪しげな銀行すら出現していたという (144-45)。

こうして乱発された紙幣の多くに“wildcat”が印刷されていたことから、それらを乱発する種々雑多の零細銀行を“wildcat bank”と呼んで親しんだ。銀行は求められれば発行紙幣を金貨・銀貨（いわゆ正貨）に両替することを義務付けられていた。とはいえアメリカで製造された金貨・銀貨はそこに含まれる金・銀の利ざやを見込んで海外に輸出されていったため、国内では絶えず不足していた。そのため紙幣は、金貨・銀貨に変わる事実上の「金」として市民生活に浸透し、流通していたのである。しかし現在の紙幣と違い、雑多な銀行が無秩序に発行した紙幣はインフレと混乱を引き起こした。金貨や銀貨の保有量が少なく換金できない銀行や、信頼性の低い銀行の紙幣は、額面より低い価格に“discount”（割引）されて市場に出回る。また倒産してしまった銀行紙幣は無効ともなる。“wildcat

bank”の紙幣は平均して44%割引かれて流通していると Sellers が語っていたように、紙幣の割引率は2-50パーセントにもなっていた（Hepburn 131-78）。

また Hepburn は偽造紙幣も膨大な数に上り、“bank note detector”なる商売まで誕生していたことを指摘したうえで、W. G. Sumner が1896年に議会へ提出した非公式の報告書 *History of Banking* から興味深い数字を引用している。²

The following statement illustrates the condition of the currency from the detector's point of view:—

	1856	1862
Number of banks reported	1409	1500
Number whose notes were not counterfeited	463	253
Number of kinds of imitations	1462	1861
Number of kinds of alterations	1119	3039
Number of kinds of spurious	224	1685

(W. G. Sumner, *History of banking in United States* (1896), qtd. in Hepburn 165)

Sellers がもくろむ投機計画とは、銀行の中でも零細の“wildcat bank”をのきなみ買収して、金融界の株価を操作し莫大な利益を得るというものであった。現代ならインサイダー取引にあたるが、当時としては現実味を帯びた、そして恐ろしい計画でもあった。なぜなら“wildcat bank”の株価が上下すれば、それらの紙幣価値も乱上下し、そもそも不安定な貨幣経済はさらに混迷を深めることは必至である。当時の貨幣システムは、政府ではなく、雑多な民間銀行に支えられていたわけだが、それはまるで砂の上に築かれた城のごとく脆弱で危ういものであったことを Sellers はほのめかしている。

II

1850年代後半に空前の鉄道建設ラッシュが巻き起こると、Sellers も鉄道投機にのめりこんでいく。彼はさびれた寒村に鉄道が通ることを見込んで、そこを Napoleon と改名して開発計画を練り、土地を買収し始めたのである。南北戦争後には鉄道開発の一環として議会の働きかけ、Napoleon の治水工事という名目で20万ドルの政府予算を取り付けてしまう。ところが後から分かるのだが、政府から引き出した20万ドルは全て悪徳政治家と企業家に吸い取られていて、Sellers の元には一銭もわたることとはなかったのである。そんなことも露知らず、Sellers は20万ドルを担保として贅沢に暮らし、ついには開発事業の責任者として村人達を総動員して（といっても数十人だが）、治水工事を進めてしまう。村人達への給料や経費は“order”（手形）を発行して支払う。当時、地域によっては銀行だけでなく会社や個人商店の発行した手形も貨幣として流通していたので、Sellers の手形もまた“wildcat bank”の紙幣と同じようにひどく割引かれながらも「金」として村で流通することとなる。Sellers が発行した手形は額面上では9,640ドルにも上っていたが、その実質的な価値は下がり続け、Sellers の破産とともに紙クズと化してしまう。村に出回った Sellers の手形がいっせいに無効となったことで、Napoleon という小さな村の貨幣経済は壊滅的打撃を受けてしまうのだ。

こうして Sellers は鉄道開発業者と銀行の役割を一手に担い、Napoleon という西部の小さな村を経済破綻させてしまったのである。それはまるで茶番のごとく見えるが、1857年に全米を巻き込んだ金融恐慌の縮図でもあった。Hepburn によると、銀行は鉄道開発の波に乗り遅れまいと、資本金をはるかにこえた紙幣を発行して開発業者に貸し付けてきた。しかし異常なまでに膨らんだ融資がたたって、1857年には取引銀行のほとんどで正貨（金貨・銀貨）は底をついて業務不能となり、経済は麻痺して金融恐慌を引き起こしてしまったのである。このとき全米で3億ドルもの負債を抱えたまま5100を超える銀行が倒産したと記録されている（Hepburn 171）。

鉄道開発がもたらした銀行破綻によって、どれほどの紙幣が紙クズと化し、名も知らぬ無数の民衆を苦しめたことか。輝かしい鉄道開発の陰で見過ごされてきた闇の部分で、Sellers は Napoleon という小さな村におきた小さな経済破綻をとおして映し出していた。当時の「金」とは、正真正銘の紙幣に加えて、劣悪な割引紙幣に、偽札、無効化紙幣までが入り混じる混沌とした状況にあった。*Roughing It* において Twain は「光るものがぜんぶ金（きん）というわけではない」と説いているように、掴んだ大金が必ずしも本物の「金（カネ）」とは限らないことを Sellers は伝えている。

III

南北戦争を終えても“speculation”は繰り返され、それを支える貨幣システムつまり紙幣価値は不安定なままで、インフレにも悩まされていた。また南北戦争中に北軍政府が戦費を捻出するため発行した紙幣“greenback”の是非も騒がれるようになっていた。これに対する Ulysses S. Grant 大統領（1869－77在任）の対応を Sellers は次のような語りのなかで伝えている。

“I said to the President, says I ‘Grant, why don’t you take Santo Domingo, annex the whole thing, and settle the bill afterward.’ That’s my way. I’d take the job to manage Congress. The South would come into it. You’ve got to conciliate the South, consolidate the two debts, pay ‘em off in greenbacks, and go ahead. That’s my notion. Boutwell’s got the right notion about the value of paper, but he lacks courage. I *should* like to run the treasury department about six months. I’d make things plenty, and business look up.”
(357)

当初政府は戦争が終結した暁には、“greenback”を正貨に換金して回収す

ることとなっていた。しかし1872年には貨幣の安定した流通と経済活動を促すため、当時の財務長官 George S. Boutwell はすでに回収していた5百万ドルの“greenback”を再び市場に開放し、インフレ増長を懸念する国民の反発をうけていた。³

“greenback”を含め紙幣は戦後ますます無秩序化し混迷を深めたが、Grant 政権は有効な手立てを講じることもないまま、1873年には再び金融恐慌を引き起こしてしまう。1873年といえば、*The Gilded Age* が売り出された時期である。“A Tale of To-day”と副題されたこの物語において、Sellers は読者にとって進行中の問題を突きつけていたことにもなる。

しかしながら皮肉なことに、資本主義経済が浸透していた19世紀アメリカにおいて、「金」はあらゆる品の価値を測るのに欠かせない尺度となっていた。つまりあらゆる物に値段が付けられ、人間まで値踏みされるようになっていたのである。その典型的な例が、買収議員につけられた値段である。先ほどの Sellers が関わった Napoleon の治水事業では、開発会社の社長が20万ドルの政府予算を取り付けるために費やした費用を読み上げている。

“Why the matter is simple enough. A congressional appropriation costs money. Just reflect, for instance. A majority of the House committee, say \$10,000 apiece—\$40,000; a majority of the Senate committee, the same each—say \$ 40,000; a little extra to one or two chairmen of one or two such committees, say \$10,000 each—\$20,000; and there’s \$100,000 of the money gone, to begin with. Then, seven male lobbyists, at \$3,000 each—\$21,000; one female lobbyist, \$10,000; a high moral Congressman or Senator here and there—the high moral ones cost more, because they give tone to a measure—say ten of these at 3,000 each is at \$3,000 each, is \$30,000; then a lot of small-fry country members who won’t vote for

anything whatever without pay – say twenty at \$500 apiece, is \$10,000. . . .” (255)

上院・下院両方の委員会における過半数の議員を買収するのに、一人1万ドル。委員会議長にも一人1万ドル。男性のロビースト（議会工作員）を7人雇い、一人につき3千ドル。女性のロビーストは一人に1万ドル。善良ぶっている議員先生は法案に箔をつけるので、さらに金がかかって一人3,000ドル。田舎出の小物議員は20人もいて、一人500ドル。というように買収議員の値段リストが延々と続く。

投機師の Bigler も鉄道事業で利便を図ってもらうためには政治家たちの買収が欠かせないことをほのめかして、次のように言う始末だ。

“Yes,” continued this public benefactor, “an uncommon poor lot this year, uncommon. Consequently an expensive lot. The fact is, that the price is raised so high on United States Senator now, that it affects the whole market; you can’t get any public improvement through on reasonable terms. Simony is what I call it, Simony,” repeated Mr. Bigler, as if he has said a good thing. (143)

「最近では上院議員の値段も高くなっていて、賄賂市場全体に影響が出てきている」と、Bigler はまるで政治家が首に値札をつけて汚職という商品を市場で売り出しているかのように語る。なかでも Dilworthy のように敬虔で善人ぶる議員は箔をつけてくれるので、さらに高値がついたことは先の引用からも分かる。Dilworthy の worthy には「善良な」あるいは「名士」という意味があるが、おそらく作者は「値が張る」という意味も含めたに違いない。

同様に「値が張る」のは、Hawkins 家の養女 Laura である。彼女は Hawkins 家の Tennessee Land を政府に莫大な価格で買い取らすため、

lobbyist として活躍していた。彼女の類まれなる美貌と議会工作の手腕が重宝がられ、高額報酬を得ていたことがほめかされている。先の引用から推察すると、彼女一人で男性 lobbyist 7 人分に匹敵し、一人で 1 万ドルもの高値がついていたことになる。こうして Laura は lobbyist として莫大な利権にありついたことで、南部貴族の令嬢に祭り上げられ、社交界でもてはやされる。そして Laura に付きまとう lobbyist としての黒い噂や、彼女を裏で操る Dilworthy の汚職が取り沙汰されることはないのだ。

つまりアメリカは拝金主義社会へと転換し、多少悪事を働いても大金を稼ぎだす人間には、つまり高値のつく人間には、社会的な地位や名声、品格すら与えられる。だからこそ Tennessee Land の法案が上院委員会で審議されるのを翌日に控え、Laura の兄 Washington は動揺する。なぜならこの法案が可決されれば巨万の富が転がり込み、否決されれば極貧生活に逆戻りだからだ。この富と貧困の運命の分かれ道にたって、Sellers は怯える Washington に次のように言いきかせる。

“Yes, indeed, he is. — Why it is just human nature. Look at me. When we first came here, I was *Mr.* Sellers, and *Major* Sellers, and *Captain* Sellers, but nobody could ever get it right, somehow; but the minute our bill went through the House, I was *Colonel* Sellers every time. And nobody could do enough for me; and whatever I said was wonderful, sir, it was always wonderful; I never seemed to say any flat things at all. It was Colonel, won’t you come and dine with us; and Colonel, why *don’t* we ever see you at our house; and the Colonel says this; and the Colonel says that, and we know such-and-such is so-and-so, because husband heard Col. Sellers say so. . . .”

“Well, I do wonder what you will be to-morrow, Colonel, after

the President signs the bill?”

“*General*, sir! — *General*, without a doubt.” (515)

Sellers は現実とも空想ともつかぬ独特の語りのなかで繰り返し語ってきたように、アメリカでは僅か数ドルの元手から巨万の富へ膨れ上がることもあれば、何億ドルもの紙幣が一瞬にして紙くずに滅してしまいかねなかった。掴んだ利権や「金」の浮き沈みに合わせて、ただの Sellers が “Mr. Sellers” にも、“Colonel Sellers” にも、“General Sellers” にも格付けされてしまうのは、人の世の理である。だからこそ、この後 Dilworthy は政敵 Noble の策略にはまって汚職議員としての素顔をさらけ出し、Laura は殺人犯となりはて、Tennessee Land の法案も否決されると Wahington は社交界の寵児からもとのつつましい田舎者に戻ってしまう。「真鍮製の偽造銀貨はその正体がばれたとたん輝きを失う」(*The Gilded Age* 143) ように、「高級」とされる人々も歯車が一つ狂っただけでその輝きを失うかもしれない。貨幣システムが混乱を極めた19世紀アメリカだからこそ、「金」そして「金」ではかる人間の価値がいかにあやふやで、はかないかが見えてくると、Sellers は伝えていたのである。

そこで物語も終盤を迎えたころ、Sellers は興味深いことを言っている。Sellers が Laura の犯した殺人事件の裁判において、弁護士から尋問を受けている場面だ。

Cross-examined. “Major Sellers, what is your occupation?”

The Colonel looked about him loftily, as if casting in his mind what would be the proper occupation of a person of such multifarious interests, and then said with dignity: “A gentleman, sir. My father used to always say, sir.” (509)

Sellers は職業を聞かれて、即答しかねる。彼のように投機に狂って様々

な事業に関わってきた人間に当てはまる職業など容易に思いつかなかったからだ。しかし彼はしばらく考えた挙句、誇らしげに“gentleman”だと答えるのだ。

“gentleman”はもちろん職業ではない。一般的にイギリスにおける“gentleman”とは中産階級に属し、働かなくとも、あるいは少なくとも知的職業や企業経営を通して豊かな収入を得ていることはもとより、礼節ある振る舞いと品位と教養を保った人物を gentleman と呼ぶこととなる。⁴ しかしアメリカではイギリスのような階級制度もなく、とりわけ西部僻地のような新興社会では秩序も乱れ、“gentleman”の定義も実にあいまいとなっていた。例えば Twain の父親 John Marshall Clemens は F. F. V. としての血統の良さと教養の高さを誇る人物であったが、経済的には破綻して流れ着いた Missouri で極貧にありながらも、“southern gentleman”としての威厳と名誉を保ち暮らしていた。しかし Twain は父親の姿に嫌悪感だけでなく、憐憫と悲哀の情をもって見ていたと考えられる。なぜならアメリカではすでに貧富の差により新たな階級秩序が出来上がりつつあり、経済力を持たない名前だけの“gentleman”を嘲笑する風潮がすでに出来上がっていたからだ。

Leland Krauth は *Proper Mark Twain* において、Twain が破天荒な生き方を送っていた反面、“gentleman”として生きたいという願望も強かったと指摘する。だがアメリカにおいて“gentleman”たるには品格・教養・家柄を保つだけでは不十分で、やはり経済的成功が欠かせないことも Twain は十分に認識していた。Twain が1873年に渡英した際に London の知人に送った手紙には、年俵8,000（4万ドル）の安定して収入を得て、あくせく働かずとも自宅でのんびり過せる豊かな生活を目指していることを明かしている。彼が金銭的成功を基盤としたイギリス流の“gentleman”を意識していたことが分かる（*Mark Twain's Letters* Vol.5 539）。

ところがこうしたイギリスとアメリカにおける拝金主義の風潮に反して、

Sellersは財産も収入源となる職業すら持たない貧しい暮らしにありながら、何を恥じることもひがむこともなく、“gentleman”としての威厳と誇りを掲揚と保っている。その姿は、Twainの時代のみならず、現代においても奇異に映る。しかしSellersにとって、“Colonel”と“General”には僅かな差しかないように、貧しい者と富める者は紙一重でしかなかったのだ。燃料すら買えずにろうそくを灯すだけのストーブをリュウマチ予防の贅沢と教え、カブだけのひもじい食卓を自分達だけに許された疫病予防の高級菓膳だと誇る。貧困と富を混同するかのようなSellersの発想が生まれた背景には、市場主義を謳いながら、その基盤となる貨幣システムは混乱を極め、投機ブームと金融恐慌を繰り返す破天荒な経済にあった。このような状態にあって「金」ほどあてにならないものはなかったと言える。拝金主義の時代にあって「金」を信用できないという皮肉がSellersのような人物を生んだのである。

Twainも実生活においては「金」に執着し、自らの収入、値打ちには強くこだわってきた作家の一人であった。記者時代には自分の記事の値段を少しでも吊り上げようと試行錯誤し、講演興行を始めると講演家としての値段を絶えず気にして、ライバル講演家の契約料には過敏にもなった。また作家の値打ちを占う著作権料には執拗にこだわり、著書を出版するにあたっては出版社との交渉に粘り強くあたってきた。そうして *The Gilded Age* を出版したころから確実に積み重ねていった富も、1894年の金融恐慌が引き金となって失ってしまう。経済成長の波に乗って富を膨らませ、不安的な金融システムのあおりをくって蓄財をつぶすという、“the Gilded Age”特有のサイクルにTwain自身が踊らされていたのである。

Twainは拝金主義の時代にあって「金」が信用できないジレンマを身をもって体験していたわけだ。こうした経験から培われた「金」あるいは資本主義経済に対する無常観は作品のなかで熟成され、Sellersをもってして打ち出される。Sellersの金に狂いながらも金に頓着しない超越的な

姿をのびのびと膨らませることで、Twainは「金」の無常を訴え、「金」に支配されたアメリカ社会のはかなさ・空虚さを嘲笑っていたのである。

本稿は2006年9月17日福井大学における関西 Mark Twain の会・シンポジウム『Mark Twain と金』において発表したものを手直したものである。

注

- 1 Rothschild とは、19世紀後半に「諸王の王、諸銀子の王」と呼ばれ、ドイツ、フランス、英国などヨーロッパの金融業界を支配し、栄華を極めたユダヤ人銀行家一族である。『ロスチャイルド家』（横山三四郎）参照。
- 2 Hepburn は当時の偽造紙幣が蔓延する状況を次のように説明している。

The bank-note detector did not become divested of its useful but contemptible function until the national bank system was founded. It is difficult for the modern student to realize that there were hundreds of banks whose notes circulated in any given community. The bank-notes were bits of paper recognizable as a species by shape, color, size and engraved work. Any piece of paper which had these came with the prestige of money; the only thing in the shape of money to which the people were accustomed. The person to whom one of them was offered, if unskilled in trade and banking, had little choice but to take it. A merchant turned to his 'detector.' He scrutinized the worn and dirty scrap for two or three minutes, regarding it as more probably 'good' if it was worn and dirty than if it was clean, because those features were proof of long and successful circulation. He turned it up to the light and looked through it, because it was the custom of the banks to file the notes on slender pins which made holes through them. If there were many such holes the note had been often taken in bank and its genuineness was ratified. . . . We would expect that a free, self-governing, and, at times, obstreperous, people would have refused and rejected these notes with scorn, and would have made their circulation impossible, but the American people did not. They treated the system

with toleration and respect. A parallel to the state of things which existed, even in New England, will be sought in vain in the history of currency.” (165)

- 3 詳しくは *Mark Twain and the Gilded Age* (131-32) を参照。
- 4 イギリスにおける “gentleman” の定義は、19世紀中葉の産業革命以降から大きく変容していく。村岡健次によると、従来の地主層に加えて、新興の企業経営者が潤沢な財力を背景に “gentleman” に加わってくると、それにともない “gentleman” の定義も変容してくることとなる (『ヴィクトリア朝イギリスの政治と社会』132)。こうした歴史的背景からして、イギリスの “gentleman” 理念は壮大な問題であるため、ここでは省略させてもらう。さらの新世界アメリカで生まれた “gentleman” についてはこれまで詳細な考察がなされてこなかったこともあって、本論の域を遥かに超える重大な問題と考え、今後の課題としたい。

参考文献

- Bettmann, Otto L., *The Good Old Days: They Were Terrible*. New York: Random House, 1974.
- Fanning, Philip Ashley. *Mark Twain and Orion Clemens: Brothers, Partners, Strangers*. Tuscaloosa and London: The U of Alabama P, 2003.
- French, Bryant Morey. *Mark Twain and the Gilded Age*. Dallas: Southern Methodist UP, 1965.
- Gillman, Susan. *Dark Twin: Imposture and Identity in Mark Twain's America*. Chicago and London: The U of Chicago P, 1988.
- Hepburn, A. Barton. *History of Currency in the United States*. Honolulu: UP of the Pacific, 2002.
- Krauth, Leland. *Proper Mark Twain*. Athens and Georgia: U of Georgia P, 1999.
- Neider, Charles, ed. *The Adventures of Colonel Sellers*. London: Chatto and Windus, 1966.
- Powers, Ron. *Mark Twain: A Life*. New York, London, Toronto and Sydney: Free P, 2005.
- Schlereth, J. Thomas. *Victorian America: Transformations in Everyday Life, 1876-1915*. New York: Harper Perennial, 1992.
- Twain, Mark. *Gilded Age: A Tale of To-day*. New York and Oxford: Oxford UP,

Colonel Sellers と「金（カネ）」

1996.

——*Mark Twain Letters Vol. 5: 1672-1873*. Eds. Harriet Elinor Smith. Berkeley, Los Angeles and London: U of California P, 1997.

永原誠『マーク・トウェインを読む』山口書店 1992年

マーク・トウェイン著 那須頼雅訳『金メッキ時代』上下巻 山口書店 1980年

横山三四郎『ロスチャイルド家—ユダヤ国際財閥の興亡』講談社 2006年